

## あおぞらだより

第155号(発行/平成28年4月)

### OT 活動の様子

#### 離職

江戸川病院院長 新村ヨシオ



院庭/オオシマザクラ

離職は職業を辞めて仕事を失うことである。離職の理由は様々であろう。自身の心身の障害や環境の問題など、自分では解決しがたい難局にぶつかるからだろう。離職が社会話題になってきたのは、バブル崩壊、リーマンショックなど経済情勢の悪化で、リストラが蔓延してきたころからよく耳にするようになってきた。実際は解雇であったが、リストラとか離職という言葉で、暗黒の社会の衝撃を緩和していたように思う。激しく言えば、藪首(かくしゅ)と言って首切りなのだが、マスコミをはじめ労働団体も言葉には神経を遣っていたと考えられる。雇用関係は社会構造の変化によって連動するので、本人だけの責任ではないが、失業すれば生計が立たなくなってくる。

大きなストレスとなって精神的負担を受け、精神科的診療を求めてクリニックや病院を受診してきた。最近多くなってきたのは、家族内に病人が出て介護のために離職する人である。いわゆる介護離職者である。

離職後に介護に専念することになるので、離職者が精神的負担を感じて当事者が受診することはない。介護という役割を考え、離職するまでに覚悟しているので、ほと

んどの人は役目を献身的に最後まで全うする。病気は突然発症するし、医療制度が変わってきて長期入院が出来なくなってきたし、それに核家族化や少子化ということもあり、家族内に介護の担い手がいない為離職しなくてはならない。祖父母が要介護者となった時に、年齢の巡り合わせと収入などを考えると、孫の世代が介護要員に該当し、離職したと話されることも多くなってきた。介護給付の支援網は年々充実していくが、利用を拒否する方も多く、そのお宅の負担は想像を絶するものがある。拒絶する要介護者を世話する程、家族に大きな苦悩を与えることが多く、しかもそれは外部の人には全く見えないことである。核家族ではとても対応できなくなり、追い込まれてしまうので、その人たちの救済が叫ばれている。

離職してまで介護すべきかという問題は国も懸念しており、安倍首相も「介護離職者をなくす」と国会答弁で明言している。地方は本当に大変だと思う。隣や近所といっても離れており、世代交代も進み、集落の個々も孤立化し、慣習も変化していく中で助け合いを仕切る人もいなくなっている。一言で過疎化というが、生活そのものが立ち行かなくなり、世紀末の様相を呈しているところもあると聞く。檀家も少なくなり、お寺がお墓を守れなくなっている。少子化は確実に来るので、都市部でも同様のことは起こると皆が予想できる。そうなれば介護保険制度も崩壊し、人手は不足するので自分たちのことは自己責任でということになり、要介護者が発生すれば家族のうちの誰かは離職しなければならなくなるのは自明の理である。当院にも祖父母が揃って病床に伏したり、家族に手が無い家庭では配偶者や同胞、そして孫に離職者が出ているのを経験しているし、未婚で介護している子供にも複数人出会っている。

離職というと、介護職員も仕事が重労働で退職する。職員であれば職業意識で耐えられることもあるのに、苦痛が伴い辞める人も多い。ましてや自宅介護だと24時間拘束される。我々が見聞きするのは、介護の為に離職した方の苦悩である。ほとんど経験のない介護は見当もつかないし、自身のやり方が正しいのか、疑心暗鬼のまま相手に振り回されるので、仕事の評価も受けられず疲労だけが残ってしまう。家族の誰かが離職しないと対応できない被介護者は、意思疎通しないし抵抗が強く、暴言や暴力も多く、被害妄想などが顕著で拒食や拒薬、入浴はじめ整容にしても暴れて抵抗するなど病前の本人とは考えつかない人格変化を来している。介護者は戸惑い、落胆、無力感など自信喪失させられるし、虚無感を覚えるし、ストレスはかかる一方で、全く出口が見えなくなる。いずれ対象者は亡くなる運命にあり、苦勞が報われず虚脱感に襲われ、喪失感を味わい、復帰どころではない。それで再就職となると活力がわいてくるだろうか。介護離職は残酷である。頑張ったのに、その後の保証はなく、生活権も奪われてしまう。

# 屋外活動

## 再開しました

暖かくなって、屋外でのOT活動が再開しました。



## 新しい職員が入りました。

- 非常勤医師
  - 大森 裕
  - 五十嵐 礼子
- 看護師
  - 佐久間 幸子
- 看護助手
  - 鈴木 晃子
- 作業療法士
  - 山本 和也
  - 久我 道生
  - 堀 佳織
- 精神保健福祉士
  - 島田 奈津子

宜しく願いします！